

佳作

成長した夏休み

茨城県ひたちなか市立那珂湊第一小学校四年 後藤 伸之介

サッカーの練習試合後、太陽がいつもより意地悪だと思った。一勝も出来なかったぼく達を、まるでやき肉にするみたいに照りつけてきた。顔が痛い。ジリジリとやかかれていくぼく達、このままばつゲムみたいに、やき肉にされるのは、くやし過ぎる！

「伸之介、起きて！」

お母さんのでっかい声に起こされた。昨日の夜、負けて落ち込んでいたぼくを見て、お母さんは、「つかれた体を休ませるのに、朝はゆっくりねていていから」って、言っていたのに忘れたのかな？返事をしないでいると、

「今日の六年生の大会、メンバーが足りないんだって。今、伸之介に声がかかったけど、どうする？」

「足がいたいから、行かない。」

すぐに返事をした自分にびっくりした。足がいたいのはうそじゃない。行きたくないわけでもない。ただ、昨日の試合で勝てそうな相手にも勝てなかったくやしさと、ゆっくりねむらせてもらえなかったイライラで、ぼくは、きげんが悪かっただけだ。

「本当に？ことわっちゃうよ？いいの？」

「行かないってば！」

い心地の悪い時間はどれくらいたっただろう。起きてリビングに行ったら、庭のしばかりをしていたお父さんと目が合った。お父さんは、しばかり機の音よりも大きな声で言った。

「五分やるから考えろ。いつも指どうしてもらっていて、こういう時に恩返しするのがお前の役目なんじゃないのか？」

今度はすぐにいい返せなかった。そんな事、言わなくてもぼくが一番分かっている。すぐに「行く」って言えなかった後かいは、ふとんの中にいた時からずっとつづいている。

「行くよ、行けばいいんだろ！」

おこったように言い返してしまったけど、心の中は、「行く」って言えて少しホッとしていた。

午前中の予選リーグは三勝した。ぼくも二点シュ

トを決めた。午後からの試合は、暑くて中止になったけど、その結果ぼくたちはゆう勝した。

ぼくは、勝つためにどうすればいいか、たくさん考えてプレーした。六年生もそれに応えてくれた。昨日のくやしさが、今日はエネルギーにかわったみたいだ。昨日の試合に勝っていたら、きっと何も考えずに六年生の試合に出ていたかもしれない。「なぜうまくいかなかったのか」と考えたことは、昨日よりも今日のぼくを成長させてくれた。

昨日より黒くなったぼくの顔は炭火でやいたみたいだ。お父さんのわらった顔は、こげたしどうにみえた。決めた。今日の夕ごはんはやき肉が食べたって、おねがいしてみよう。